

平成16年度共同研究活動報告書

平成16年度における本学の「音楽療法に関する臨床的研究」の主な研究実践活動は、以下のように報告いたします。

【共同研究者名】木村 滋¹⁾ 重川 敬三²⁾ 富野 弘之³⁾ 他4名

【研究課題名】音楽療法に関する臨床的研究

【研究目的】音楽による「癒し」を究明するため、定期的に研究会を開催するほか、音楽療法の実践を行ない普及活動を推進する。また、創作曲の普及活動を通してその有効性を検討する。

【研究実施報告】

1. 定期的研究会の開催

(1) 開催 平成16年4・6・9・12月の4回(土) 14:00~16:30

(2) 会場 日本赤十字秋田短期大学 合同講義室、他

(3) 議題等

①平成16年度音楽療法一般公開の開催について (音楽療法士の単位認定可)

・講演：栗林 文雄(名古屋音楽大学教授)
演題：音楽による援助活動と文化

・演奏：桜井健(チェリスト 昭和音大講師) 弦楽四重奏「音と心の調和」
ヴァイオリンI服部まり、ヴァイオリンII坂本陽子、ヴィオラ坂本晴人

・予算について
・当日会員の役割について 他

②日本音楽療法学会東北支部第4回学術大会の開催について (音楽療法士の単位認定可)

・講演：貫行子(音楽療法効果の科学的証明について)

・シンポジウム：テーマ「感じとる力」

シンポジスト 栗林 文雄、原沢 康明、橋本 誠、坂本 昌
コーディネーター 遠藤 安彦

・予算について
・参加者名簿の作成について 他

③会員の音楽療法活動について

・佐藤美津子会員より高齢者を対象としたピアノを使用した音楽療法
・坂本昌会員より統合失調症患者に対する集団精神療法での音楽療法
・九島弘子会員より高齢者施設でのアコーディオンを使用した歌唱を中心とした音楽療法。
・諸橋有子会員より高齢者を対象としてクラシックギター使用の対面式演奏による音楽療法

④平成17年度音楽療法一般公開内容について

・講演：遠山 文吉(日本音楽療法学会常務理事) ・演奏：楠 司郎(ハーモニカ)

1) 特任教授(英語担当・音響音声学専攻) 2) 看護学科講師(スポーツ・健康科学)

3) 事務部総務課長(音楽療法授業協力、作曲・編曲)

本研究活動報告は平成16年度共同研究費の助成を受けて行った「音楽療法に関する臨床的研究」に関する報告である。

2. 各種研修会の実践

平成16年度における他団体から研修会等への派遣依頼による音楽療法実践は下記のように実践した。

(1) 音楽療法研修

主 催：岩城町ボランティア連絡協議会（共催：わっこの会）

開催日時：平成16年6月30日（水）13：30～15：00

会 場：岩城町役場

参加者：14名（障害児施設職員、特養職員、看護師、主婦）

出席者：坂本 昌 富野 弘之

実践内容：音楽療法の心構え。演奏しているときよりも一斉に止めたときの一体感を感じる。
歌唱として夏は来ぬ、みかんの花咲く丘他

(2) 音楽療法研修

主 催：岩城町ボランティア連絡協議会（共催：わっこの会）

開催日時：平成16年7月17日（土）13：30～15：00

会 場：岩城町役場

参加者：14名（障害児施設職員、特養職員、看護師、主婦）

出席者：坂本 昌 富野 弘之

実践内容：リズムを感じとる力を養うため、ラテンのリズムを題材にした。各参加者に楽器（パーカッションーマラカス、ボンゴ、コンガ、クラベス等）を持たせて実践した。また、トライアングルやツリーチャイムを鳴らさせ、どんな曲のときにこの楽器を使うと効果が現れるかを感じとらせた。

(3) 音楽療法研修

主 催：岩城町ボランティア連絡協議会（共催：わっこの会）

開催日時：平成16年9月16日（木）13：30～15：00

会 場：岩城町役場

参加者：10名（障害児施設職員、特養職員、看護師、主婦）

出席者：坂本昌 富野弘之

実践内容：前回に引き続き曲調にあった楽器の選択について検証した。ワルツ、バラード、ラテン等のリズムを感じとる力を養わせた。

(4) 音楽療法研修

主 催：岩城町ボランティア連絡協議会（共催：わっこの会）

開催日時：平成16年10月15日（金）13：30～16：00

会 場：亀田町高城センター

参加者：7名（障害児施設職員、特養職員、看護師、主婦）

出席者：坂本 昌 富野 弘之

実践内容：5音音階（ペンタトニック）の活用。トーンチャイムを使用し、五木の子守歌を演奏して、自分が鳴らしている音が曲の中に溶け込んでいることを実感してもらった。

(5) 音楽療法研修

主 催：男鹿みなの市民病院

開催日時：平成16年10月26日（火）15：00～16：00

会 場：男鹿みなの市民病院

参加者：50名（患者、看護師）

出席者：坂本昌 富野弘之

実践内容：・楽器による挨拶（コンガを鳴らして手を叩いてもらう）
・高齢者が多かったのでヴァイオリンで「籠の鳥」を演奏し、歌ってもらった。（回想法）中には6番以上まで歌える人もいた。
・5音音階（ペンタトニック）の活用。トーンチャイムを使用し、「さくら」、「荒

城の月」を演奏し、鳴らしてもらった。トーンチャイムのやわらかい音色にいままで堅かった表情がふっと穏やかに変わった。

- ・軽度の知的障害の子どもが来ており、大変歌が好きというのでシャボン玉を演奏して実際にシャボン玉をふいてもらった。楽しそうにいつまでもふいていた。
- ・最後にみんなに楽器（パーカッション）を持ってもらい「おもちゃのチャチャチャ」を歌って終了した。

(6) 音楽療法研修

主 催：岩城町ボランティア連絡協議会（共催：わっこの会）

開催日時：平成16年11月30日（火）14：00～15：30

会 場：岩城町特別養護老人ホーム「広洋苑」

参加者：入所者20名、わっこの会8名

出席者：坂本 昌 富野 弘之

- 実践内容：
- ・楽器による挨拶（太鼓を持って何も言わないで鳴らし、相手が鳴らしてくれるまで続ける）
 - ・ヴァイオリンで「籠の鳥」を演奏し、歌ってもらった。（回想法）かなりの入所者が歌ってくれた。
 - ・アコーディオンに合わせて簡単な体操をしてもらい、リラックスさせた。
 - ・季節の歌（秋）として「紅葉」、「どんぐりころころ」を歌ってもらった。
 - ・即興演奏を行う。この即興演奏は予定に入れていなかったが、入所者の中から「何も出来ない」と言う人がおり、とっさに題名「私は何も出来ない」という曲を創って歌った。そうしたらその入所者が笑いながら歌い初めた。自分も参加出来たという喜びを感じ取れた。
 - ・入所者が退場する際に「きよしこの夜」をヴァイオリンで静かに演奏すると、いままで暗い表情をしていた93歳の女性が、突然歌い始めた。それはソプラノで澄み切った声であり、はつらつとしたとても93歳とは思えない歌声であった。音楽療法の理論として理解している「それぞれの人毎に癒される曲が違う」という節理が実証できたと感じた。

3. 創作曲の実践

身体と精神の健康づくりに視点を置き、昨年度創作した曲「日赤健康体操」を講義（介護福祉学科1年「レクリエーション活動援助法Ⅰ」重川敬三講師担当）で実践した。

テンポは比較的ゆったりとしていて体を動かすには無理のない速さであった。また、学生の表情からも心地よく踊れるという雰囲気伝わってきた。今後は一般市民への普及を図る。

4. 第4回日本音楽療法学会学術大会への参加

日 時：平成16年9月3日（金）、4日（土）、5日（日）

会 場：川崎医療福祉大学（岡山県倉敷市）

内 容

<講習会>

①「質的・量的リサーチの方法論」 栗林 文雄（名古屋音楽大学）

- ・音楽療法と研究法
- ・研究の意味
- ・研究手法
- ・哲学的研究（分析、批評、推論）
- ・歴史的研究
- ・記述的研究

- ・応用行動的アプローチ
- ・実験的研究
- ②「音楽心理学～なぜ音楽療法に必要なのか～」 谷口 高志 (大阪学院大学)
 - ・音楽心理学のめざすもの
 - 音の音響・物理学的性質を理解する。
 - 周波数と高さ、振幅量と大きさ、波形と音色など物理量と心理量の対応度合
 - 音の心的処理の仕組みを理解する。
 - 耳に入る音をどのように選択・郡化し、旋律、リズム、和声などを把握するのか
 - 記憶やその他のどのような働きによって、音楽の同一性を認めたり、過去経験や感情を呼び起こしたりするのか
- ③「感覚統合と音楽療法」 土田 玲子 (広島県立保健福祉大学)
 - ・感覚統合とは
 - ・感覚は脳の栄養 (感覚剥奪と豊環境効果、聴覚と前庭感覚、触覚と固有感覚)
 - ・過敏と鈍感
 - ・脳の目覚め
 - ・両側統合と運動企画
 - ・音楽の発展的意味 (感覚的側面、運動的側面、言語コミュニケーション的側面、認知的側面、社会性の側面、情緒的側面)
 - ・脳が栄養をよりよく吸収できる3つの条件
 - ・治療者の役割と責任
- ④「最新のカウンセリング技法」 松原 秀樹 (日本赤十字広島看護大学)
 - ・音楽療法と心理療法
 - ・日本におけるカウンセリングの歴史
 - ・カウンセリングの定義
 - ・カウンセリングの発展
 - ・カウンセリングにおける身体への注目
 - ・治療条件の解明

<講演>

- ・特別講演 湯川れい子
 - 演題「音楽って何だー音楽ファンの目から見た音楽療法への期待と提言」
 - 自身の幼児体験を通じて米軍のアメリカンポップスが一番いやされたこと、いまでも音楽に助けられていることが話された。
 - 最後に今一番癒される曲としてスーザンオズボーンの「浜辺の歌」が紹介された。
- ・大会長講演 岸本 寿男
 - 演題「音霊 (おとだま) に寄する想い」ーこころを揺さぶる音・音楽とはー
 - なぜ人は音楽を聴いて心を揺さぶられ、感動し、癒されるのかということが心理学、医学、科学、芸術学の分野で明確に見出し得ていないという現状を踏まえ、実際に音の効果がどうあるかを実体験してもらうため、言葉でなく音を中心に伝えるとして、尺八、ギター、ピアノ、ヴォーカルで演奏を行った。曲はオリジナルを中心であったが、和楽器の音と洋楽器の音が絶妙にミックスされ、何とも心地よい雰囲気であった。(文責 富野 弘之)